

『意欲的に取り組み、自ら追究する児童の育成』

～「話すこと・聞くこと」の指導の工夫・改善を通して～

I 研究の内容

1 研究の目標

「伝え合う力を高める言語活動を工夫し、国語科の「話すこと・聞くこと」で身に付けた力を活用し、子どもたちの豊かな人間性を育む。」

井尻小学校がめざす「豊かな人間性」とは

- ① 自分から進んであいさつや返事ができる子ども
- ② 読書に親しむことができる子ども
- ③ 自分の思いを、豊かで正しい言葉を使って表現できる子ども
- ④ 共感をもって、他者との心のふれあいがもてる子ども

2 研究の具体的内容と方法

(1) 児童の国語科における基礎・基本の実態の把握

- ・ 5月と2月に児童アンケートを実施し、1年間の変容を読み取る。
- ・ 記述欄を設け、具体的に「できない」「できる」理由の解明

(2) 国語科における基礎・基本についての理論研究

- ・ 「話すこと・聞くこと」のとらえ方や国語科及び「話すこと・聞くこと」の目標などを講師等を招いて研究する。

(3) 国語科における、基礎・基本の定着を図る学習指導法の研究

① 指導と評価の一体化

- ア 子どもたちとの目標の共有化と努力目標の設定
- イ 目標の明確な授業づくり → 1授業1目標・1評価
- ウ 学習の成果が実感できる自己評価、他者評価の工夫→負担にならない
楽しいカード 自己有用感が得られる 次の活動に生きる

② 指導方法の工夫

- ア 児童の実態を考慮した学習課程の工夫 → 目標の確認の重視
- イ 児童の実態を考慮した学習カードの工夫 → 個人差を考慮したもの
- ウ 児童の実態を考慮した学習形態の工夫 → なるべく少人数で話し合う
- エ 評価規準の具体化と評価される子どもへの指導→個に応じた指導

(4) 研究授業による検証

- ・ 1人1実践を通して指導の工夫・改善を検証する。
- ・ 2回は指導主事を招聘し、研究への助言を頂く。

II 成果と課題

1 研究の概要について

- ・研究主題は今日的な課題であり、本校の実態に合っていた。様々な方法で「話すこと・聞くこと」について理解し、「話すこと・聞くこと」を伸ばす指導の工夫・改善が図られた。
- ・構成人数等から研究組織を2つにしたことは、討議の深まりやブロックを通じてより研究が深められ良かった。しかし、研究の柱を系統的に研究するには、もっと連絡を密にする必要があった。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 児童の国語科における基礎・基本の実態把握アンケート

- ・児童の実態から課題を明確化できたので良かった。成果として、意欲や話題設定、相手意識の項目で「できる」「どちらかといえばできる」子が増えた。しかし、アンケートを2回実施するのは、1回目の結果を踏まえて指導に生かすためだが、2回目の方が結果が悪くなっている項目もあり、課題として挙げられた。

(2) 国語科における基礎・基本についての理論研究

- ・講師の先生、校内での先生方の学習会を通し、話すこと・聞くことのポイントや「基本話型」や「基本聴型」の系統図などの基本についての理論研究など様々なことが学習できた。しかし、指導主事に出してもらったカルテなどの様々な資料をどのように活用していくかの検討を深めたかった。

(3) 国語科における、基礎・基本の定着を図る学習指導法の研究

- ・児童の実態を考慮した学習課程の工夫は、話し合い活動に課題がある本校の児童にとって、理解を深めるのに有効な手段であった。
- ・「1授業1目標1評価」で、児童が目標を明確にして学習に取り組むことができた。来年度も継続していくことが大切である。
- ・学習カードでは、「話すこと・聞くこと」という点から、後で振り返ったり、どれだけ達成できたなどで、他者評価や自己評価の必要性が挙げられた。

(4) 研究授業による検証

- ・授業実践を通して、研究の成果や課題の洗い出しをすることができた。また、授業実践を行うことにより、職員全体で授業の流れや方法、発問の仕方などを互いに深め合うことができた。しかし、授業研究を他教科に広げたことで視点のぶれがあったので、授業の中で「話すこと・聞くこと」がどれくらい定着しているのかを検証していくことが課題として挙げられた。

III 成果物

- ・第2学年国語科指導案「あったらいいな、こんなもの」
- ・第5学年国語科指導案「インタビュー名人になろう」

(研究主任 内田俊彦)